

釈尊と宗祖との間

— 三宝帰一の課題 —

金子大栄

一

釈尊の原始教団においては、仏・法・僧の三宝は明らかに別体であった。仏とは釈迦であり、法とは涅槃に向う行であり、僧とはその行法を修する出家の聖者たちである。しかして、この仏・法・僧に帰依することが、仏弟子であり、また仏教信者であることの標幟であった。

仏とは覚者ということであるから、その名義からいえば、必ずしも釈迦一人に限らぬことのようにも思われる。僧もまた覚りを得れば、仏といつてよいのであろう。されど、覚れる僧は阿羅漢といわれて仏とはいわれなかった。ただ釈迦のみが仏といわれたのは、特に仏法の創設者であり、大導師であるからである。こうして仏・世尊といわれるものは釈迦のみであるということは、長い伝統ともなったのである。

法とは、その仏に依りて説かれた教説である。しかるに、その釈迦原始の教説を明らかにすることは、甚だ困難であるといわれている。されど、それは要するに、涅槃に相応する行法であるといつてよいのであろう。四聖諦ということは、已にいくらか纏められたものであるかも知れない。それは涅槃に対向して、人生を諦観するものと解せられ

ている。特に八聖道とは、即ち八向涅槃道であると説かれている。しかれば、仏説の法とは、すべて涅槃に相応するものにほかならぬのであろう。釈迦もその法を師とし、弟子たちに対しても「法を灯とせよ、法に帰依せよ」と教えられたのであった。

僧とは和合衆であり、特に出家の比丘・比丘尼である。それは法友として、相和し相勧めて、道を修めたる人々である。しかし、それが教団の体ともなっているのである。したがって、その行法には、厳しい戒律も規定せられてあったのであるが、しかし、その理想とするところは、常に心を定めて涅槃を身証する智慧を得ることにあったのである。

しかして、その教団の人々の生活は、在家の信者に依りて維持せられた。在家の信者は、仏・法・僧を三宝として帰依し、在家相応の戒をも守り、愛欲を離れないながらも、涅槃の法を思慕せるのである。

二

しかるに、その三宝は、釈迦の入滅によりて、その一宝を失うこととなった。しかも、その一宝こそ、それなしには、仏法もないと思われるほどのものである。弟子たちにとりては、まさに闇夜に光を見失える悲しみであった。信者もまたその帰依に迷わざるを得ぬのである。その悲歎は、今さらに在世の仏陀を追慕して、その教化の恩を思わざるを得ぬことになったのであろう。それは、親を失える子が、親のゆくえをたずねるように、仏のありかをたずねるところともなったのである。

そこに、先ずもって現われたるものは、「法の中に仏あり」という思想であったのであろう。「生時にはその行を見、死後にはその志を思う」ということがある。弟子たちも、仏の在世には、その人格に服してその言教を聞いたのであるが、逝ける世尊に対しては、その教法において、その精神を思うよりほかないことになったのであろう。「人

々をして生死を苦と知りて涅槃を求めしめたい」。それが仏の願いであった。四諦も八聖道も、そのために説かれたものである。しかれば、これらの教法の上にこそ、世尊の慈悲と智慧とを感知すべきであろう。その教法を行修することを忘れて、徒らに仏陀の入滅を悲歎することは、かえって凡情といわねばならない。眞の仏弟子は「法に依って人に依らず、智に依って識に依らない」ものであらねばならない。まことに、その「法に依り智に依る」ものこそは常に仏を見、仏に遇うものといつてよいのであろう。それはいいかえれば、仏はその入滅に依りて不滅を明らかにせられたものである。

ここから、『大涅槃經』等に説かれた「法身不滅」や「如来常住」の思想も生じたのであろう。仏陀の入滅を見るものは、信眼のないものである。法の眞実を知るものは、如来の常住を感じるのである。そこからまた「如来即ち涅槃」という思想も現われたのであろう。覚者としての如来と、所覚としての涅槃とは別なものではない。しかして、その「如来即ち涅槃」と知るものこそ、衆生の仏性といつてよいのであろう。その仏性とは、「不滅の如来は、衆生わんれちの胸のうちに」ということであつたと解してもよいものではないであらうか。

この「法中有仏」の思想と並んで、「僧中有仏」という思想が行われた。「自今已後、わが諸の弟子、展転して、之これ（自利利人の法）を行ぜば、則ちこれ、如来の法身、常に在りて滅せざるなり」ということは、已に釈迦の遺教せることである。禪家に「祖々正伝」を「ほとけ仏にさづけてよこしまなるなき」といふものというも、このころであらう。「法」といっても「道」として行われるものであるかぎり「人」の導きによるものでなければならぬ。しかれば、その人としての釈迦は見失われても、釈迦の道を承けつぎ伝える仏としての人がなくてはならぬのであろう。それこそ仏道に達せる僧でなくてはならない。その僧は、教団の長として、第二・第三の仏と崇めらるべきものである。道人としての僧は、その願いをもち、その信念をもつて立たねばならない。それでなくては僧中有仏といつても、観念論になってしまうであらう。こうして道人のあるかぎり、仏陀は常住するという思想は成立するのである。

とはいえ、法中有仏にせよ僧中有仏にせよ、その背後には、常に逝ける仏陀の徳が思念されてあることを忘れてはならない。したがって、その顕われたる事実としては、如来の常住は法中有仏と僧中有仏で証明されてはいるが、隠れたる真実としては、法中有仏も僧中有仏も如来常住の信心によりて維持せられているのである。そこから常住の帰依は、ただ如来のみであり、法と僧とは究竟の帰依ではないという『勝鬘經』の説も現われたのであろうか。しからば、三帰依というも、ただ一つの仏帰依か、それとも、法・僧の二帰依かという問題にもなるようである。

三

こうして法中有仏と僧中有仏とが如来常住と表裏をなしていることから、已に三宝一体ということが思想せられていた。それこそ、大乘精神というものであったのであろう。しかるに法中有仏は「仏」と「法」とを一体とし、僧中有仏は「仏」と「僧」とを同視するものである。されど「法」と「僧」の一体は、どう考えられていたであらうか。それが徹底しないかぎり、三宝同体の課題も、十分に解答されてはいないのである。

しかるに、この課題に応答しようとせるものこそ、大乘菩薩道というものであったのであろう。釈迦在世の時にはその教説に随順する仏弟子声聞であつて十分であつた。されど、自身も仏と同じ徳をもたねばならぬ時となつては、自利他の行を満足し成就しなければならぬ。それは遠大なる理想である。その理想からかえりみれば、釈尊の成仏も宿世からの長い修行によられたことであらう。その釈尊の因位を念じて、成仏する修行をせねばならない。それが菩薩道というものであつた。

したがって、その菩薩道は、おのずから声聞道と異なるものがあることとなつたのであろう。声聞道においては、ただ涅槃のみが求められた。

しかるに、菩薩道では、その涅槃は寂滅を楽しむものであつてはならない。かえつて、生死のうちにありて、生死

に動乱されないとところに求められたのである。声聞地に住するは、菩薩の死である。菩薩の精神は「智慧あるが故に生死に住せず、慈悲あるが故に涅槃に住せず」というものでなくてはならない。その境地を身証することこそ、不退転の菩薩地である。

ここから、また、八正道が六波羅蜜と展開せる所以もあるであろう。それは波羅蜜といわれているかぎり、到彼岸として涅槃を理想とするものに違はない。されど、第一に、布施を挙げたところに、その涅槃は自利と利他とを円満具足するもののみ身証されるものであることを現わしているのである。したがって、六波羅蜜といっても、いわば修行の綱目であって、それを開けば十波羅蜜ともなり、諸善万行ともなるのである。

しかるに、こうして法・僧の一体を求めたることは、その遠大なる理想のために、かえって法・僧の分離を痛感せしめることとなった。それは、「仏」を見失えるものが、また「法」をも見失うようなことになったのである。したがって、法中有仏というも僧中有仏というも、共に成立せぬことであろう。されど、そうであっても、なお仏道を求めずにおれない。とすれば、その要求を満たすものは、ただ往生浄土を願うほかないのであろう。

ここで浄土教興起の歴史を語る必要はない。「五濁の世、無仏の時に阿毗跋致を求むるは難い」とせる曇鸞をうけて、「大聖を去ること遙遠なるが故に、理深く解微なるが故に」聖道の証し難きを説ける道綽の思想は、十分にその歴史を語っているのである。ただ一つ忘れてはならないことは、その浄土の願いにおいても、永遠に現在する仏が求められており、涅槃を願うところが失われてはいないことである。その永遠に現在する仏は阿弥陀と名ばれ、その阿弥陀の世界として、浄土が願われたのである。しかして、いかなる修行も成就し得ないものも、その浄土への往生に依りて涅槃が期待されたのである。

四

しかるに、法・僧の一体が、空しき理想となることは、法を見失うことであるのみではなく、また僧を見失わせるものである。僧中有仏といつても、真僧はまことに得がたい。あるいはまた、菩薩の精神あらば、在家の信者といえども、声聞僧に優るといふこともあるであらう。ここには、出家と在家の別の撤廃ということが思想せられてあった。

『維摩經』は、声聞弟子たちの不徹底を説くものである。真菩薩は、かえって在家の居士であった。『華嚴經』の五十三人の善知識の多くは、在家の信者である。それも出家の聖者たちには遠ざけられた長者や女人である。それらの人々は、それぞれの生活の分限を尽すことにおいて、普賢の徳を成就せるのである。『法華經』における地涌の菩薩というも、恐らく如来のこころを身証するものは、人間生活の大地を離れないものであることを頭わすものである。こうして、僧・俗の一体ということも思想されたのであった。

しかし、教界の実相としては、なお出家の僧が重んじられたのであらう。しかるに、いかに僧を重んじても、その僧の生活が在家と少しも変らないものとなつては、ただ名のみありて実のないものといわねばならない。しかも、それは僧であるから、特に僧道の廢頽として非難もせられ悲觀もせられることになつた。『末法灯明記』は、その歴史的事実を忌憚なく記るせるものである。その事実に見られる僧は、ただ「名字の比丘」に過ぎない。その「名字の比丘」は、もはや帰依に値しないものではないであらうか。

ここに住持の三宝ということが思想されることとなつた。仏とは、繪像・木像の本尊である。法とは、黄卷赤軸の經典である。僧とは、剃髮染衣の形相である。そのうち、繪像・木像は、仏の徳を象徴するものとして拝まるものである。したがって、黄卷赤軸の經典といえども、それを披読するものには、たとえそれに随つて行修することがで

きなくとも、何かの教訓を与うるものがあるのであろう。それは、一言一句でもよいのである。しからば、剃髪染衣の僧形は、何を意味するものであろうか。畢竟、それは愛欲・名利を離れることのできない人間生活にありても、涅槃を求むる道があることを指示するものであらねばならない。そこに願われてあることは、在家の信者を代表して教法を聞思することである。それは、いかにも経道滅尽の末法と悲しまれるものかも知れない。されど、思い返せば、それは僧・俗の別を撤廃して、仏法の普遍的意味を顯わすことともなったのである。そこに浄土教成立の根拠があった。しかれば、われらは、原始仏教において法の「真」を見ると共に、浄土の教において法の「実」が結ばれたことを、思い知らねばならぬのである。

五

ここに改めて「本願を信じ念仏をまうさば、仏になる」という真宗を思う。それは、仏教の歴史的展望において、最後に現われたもののように見える。されど、その実は仏教の歴史の根本となつていゝものである。原始の仏教が歴史的展開をしなければならなかつた事由も、またその歴史的展開が可能であつた理由も、その根本的のものがあつたからである。したがつて、仏教の歴史的展開は、この根本精神のあることを暗示しているのである。それは恰も地上の河川に対して、地下を流るる水のあるようなものであろう。地上の河川には断続があり、合流があり、清濁があつても、地底の水は、純一清浄にして断えることがないのである。

原始的なるものは、必ずしも根本的なるものではない。釈迦入滅して仏陀のありかがたずねられたということは、釈迦の仏陀であることの根本を求めたのである。そこから永遠に現在する法身が見出され、智慧・慈悲円満の仏心も感知されたのであつた。しかし、その永遠に現在する法身こそ阿弥陀とよばれ、その仏心を表現するものこそ、如来の悲願というものである。「釈迦如来かくれましまして、二千余年」を経ては、いかにその人格を思慕しても、そ

の徳相を再現することはできない。されど、仏陀としての釈迦には、無限の願があった。それは一切の衆生をして涅槃の浄染を得しめたいということである。そう思わずにおれないものが、釈迦の徳として内感せられる。「如来、世に興出したまふ所以は、ただ弥陀の本願海を説かんがためなりけり」ということを思い知らしめるものは他にあるのではない。釈迦その人の歴史的存在である。

しかるに釈迦の出現に阿弥陀の本願を感じざるを得ない理由は、その説くところの法が、涅槃と相応するものであったからである、その法が八正道と説かれ、六波羅蜜と展開することは、いかにも仏教特有のものと思われる。されど、仏教特有のものであるということは、それに対する一般的のものがあるということではない。それは人間の人間としての道であり、さらには、一切群生の帰依となるべきものである。したがって、八正道とか六波羅蜜とかいう行修は見失われることになっても、生死にありて涅槃を求むるころは、人心の底ふかく蔵たくわされているものでなくてはならない。それこそ仏性というものであろう。しかして、その仏性を表現するものこそ、南無阿弥陀仏ということである。だから「念仏者は無礙の一道なり」といわれるのであるが、その無礙道とは「生死即ち是れ涅槃なりと知る」ものである。

したがって、その行修において見失われた八正道も六波羅蜜も、念仏の内徳としては、おのずから具わっているのである。称名はこれ正業であり正念であることは、浄土の祖師たちの説くところであった。竜樹の『十住論』では、六波羅蜜も念仏の家徳としてある。しかれば、普賢の行徳というも、念仏するものの分限の生活にあることであらう。こうして念仏は、真僧の見失われた時においても行なわれるのである。それは人間の自覚の表現であるからである。

しかれば、如来の本願というも、人間のこの自覚を呼び起さしめんがためにほかならない。それは即ち一切衆生をして、浄土の涅槃にあらしめたいということである。われらは、その本願を念仏のころにおいて信知せしめられるのである。こうして、念仏することは如来の本願力によることではあるが、その如来の本願力を、受容するものは念

仏である。したがって、一切衆生のあるかぎり、如来の本願は成就しないのではあるが、念仏を信ずる身には常に成就しているのである。

ここに立ち帰りて三宝帰一の課題を思う。われらは「仏」をいわずに求むべきか。ただ念仏においてである。それが「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし 撰取して捨てざれば 阿弥陀と名づけたてまつる」のころである。しかれば、念仏を離れて観想せられている仏は、すべて化仏といつてよいのであろう。真仏は、ただ念仏において拝せられるのである。そのように「法」もまた念仏のほかにはない。念仏をもって「大行」とし「一行」とし、「正行」とし「一道」とする『教行信証』の「行巻」は、ただこのこと一つを明らかにせんがためである。

しからば「僧」はいわずに求むべきか。これもまた念仏の身となることのほかないのであろう。「真の仏弟子といふは、真の言は偽に對し、仮に對するなり。弟子とは、釈迦諸仏の弟子なり。金剛心の行人なり。この信・行によりて必ず大涅槃を超証すべきが故に、真の仏弟子といふ」とは、そのことを明らかにするものである。こうして、われらは「三宝の性、異なり」とする信不具足を離れて、三宝一体の正信に住するを得るのである。しかして、三宝それぞれの徳も、またこの一体觀の上に見開かるることである。